

大学生の学習活動に影響する 認知的要因の関連の検討

崎濱秀行*・太田伸幸**・西口利文***・平出彦仁****

問 題

人間の学習活動を理解する上で、学習者に内在している動機、先行する学習の結果に関する原因帰属、自らの学習がもたらす期待、学習目標、学習方法についての信念といった認知的要因について着目することの意義は大きい。こうした認知的要因は、学習活動のあり方を直接的に規定していると考えられるからである。その中でも、大学生の学習活動に起因する認知的側面に着目することは意義深い。その理由としては、(1)大学進学率の増加に伴い、低学力・低学習意欲の学生に対して、なんらかの教育的な介入をする必要があること(太田ら、2003)、(2)受験勉強といった学習経験が、大学での学習活動へ及ぼす影響について理解する必要があること(堀野・市川、1993)、(3)生涯学習社会のもと、大学生の学習観の再構築を支援する必要があること(堀野・市川、1993)の3点が挙げられよう。

しかしながら、大学生の学習活動に影響する認知的要因については、さまざまな構成概念が存在しており、相互の関連については十分に整理および理解されているわけではないのが現状である。こうした点を踏まえ、太田ら(2003)は、学習行動に影響しうる認知的要因を測定する尺度として、基本的

*人文学部非常勤教育技術嘱託(現所属：名古屋大学大学院教育発達科学研究科)

**人文学部非常勤教育技術嘱託(現職：愛知工業大学基礎教育センター講師)

***人文学部助手－教育心理学

****人文学部教授－心理学

学習観尺度（堀野・市川，1993），学習動機尺度（市川，1995），そして帰属，目標，能力感などのさまざまな概念を踏まえた学習態度尺度を取り上げ，それぞれの下位尺度（基本的学習観尺度から順に，それぞれ4つ，6つ，5つ）の構成概念について，主成分分析を基に検討を加えた。その結果，堀野・市川（1993）の基本的学習観尺度における「失敗に対する柔軟性」「思考過程の重視」「方略志向」「意味理解志向」の4つの下位尺度は，「学習に対する積極的態度」という主成分に集約可能であることが明らかになった。またこれらの下位尺度のうち，「失敗に対する柔軟性」と「意味理解志向」の2つについては，「学習に対する柔軟性」という主成分として整理できることも明らかになった。市川（1995）の学習動機尺度における「充実志向」「訓練志向」「実用志向」「関係志向」「自尊志向」「報酬志向」の6つの下位尺度からは，「学習の功利性」と「学習内容の重要性」といった学習動機の2軸の主成分が見出され，堀野・市川（1993）を支持する結果となった。同様に，学習態度尺度についても分析した結果，「自信のなさ」と「あきらめやすさ」といった2つの主成分に集約できることが明らかにされた。しかし，太田ら（2003）では，こうした学習活動の認知的側面間の関連については検討がなされなかった。そこで，本研究では太田ら（2003）によって確認された，基本的学習観尺度，学習動機尺度，学習態度尺度における下位尺度を集約した主成分を取り上げ，それらの関連について明らかにしていくことを目的とする。

方 法

調査対象者 愛知県および神奈川県の大學生 227 名（男性 114 名，女性 111 名，不明 2 名）

質問紙 学習態度尺度（太田ら，2003），基本的学習観尺度（堀野・市川，1993），および学習動機尺度（市川，1995）から構成される質問紙を用いて調査を行った。いずれの尺度においても，各項目に挙げられた質問に対して「まったく当てはまる（5）」～「まったく当てはまらない（1）」の5件法で

回答を求めた（なお、学習態度尺度の各項目、および、学習観尺度・学習動機尺度の説明については、太田ら（2003）を参照）。

結 果

1. 尺度間の関連性についての検討

尺度間の関連性を検討するため、相関係数を算出した（Table 1 参照）。その結果、学習態度尺度—基本的学習観尺度において有意な負の相関が得られた。また、基本的学習観尺度—学習動機尺度の間においては有意な正の相関が得られた。

Table 1 尺度間相関

尺度名	基本的学習観	学習動機
学習態度	-.45***	-.09
基本的学習観		.28***

2. 主成分間の関連性の検討

1. の結果を詳細に検討するため、太田ら（2003）で確認された各尺度の主成分に着目し（主成分名については Table 2 を参照）、主成分間の相関係数を算出した（相関係数の値については Table 3 および Table 4 を参照）。

①学習態度尺度—基本的学習観尺度

学習態度尺度—基本的学習観尺度間における主成分間の関連性を検討するため、相関係数を求めた（Table 3 参照）。その結果、学習態度尺度の「自信の無さ」—基本的学習観尺度の「学習に対する積極的態度」の間に有意な負の相関が得られた。また、学習態度尺度の「あきらめやすさ」については、

Table 2 各尺度における主成分名

尺度名	主成分名
学習態度尺度	自信の無さ あきらめやすさ
基本的学習観尺度	学習に対する積極的態度 学習に対する柔軟性
学習動機尺度	動機づけの高さ 学習内容の重要性 学習の功利性

基本的学習観尺度の「学習に対する積極的態度」「学習に対する柔軟性」双方との間に有意な負の相関が得られた。

②学習態度尺度—学習動機尺度

次に、学習態度尺度と学習動機尺度の主成分間の関連を検討するために相関係数を求めた（Table 3 参照）。その結果、学習態度尺度の「あきらめやすさ」—学習動機尺度の「動機づけの高さ」「学習内容の重要性」「学習の功利性」のすべての主成分との間に有意な負の相関が得られた。また、学習態度尺度の「自信の無さ」については、学習動機尺度のうち、「学習の功利性」との間に相関が有意であったほか、「動機づけの高さ」との間の相関も有意傾向

Table 3 主成分間の相関係数

		基本的学習観尺度		学習動機尺度		
		学習に対する積極的態度	学習に対する柔軟性	動機づけの高さ	学習内容の重要性	学習の功利性
学習態度尺度	自信の無さ	-.33***	.00	.13 [†]	.08	.17*
	あきらめやすさ	-.29***	-.20**	-.44***	-.32***	-.28***

*** : $p < .001$ ** : $p < .01$ * : $p < .05$ † : $p < .10$

を示した。

③基本的学習観尺度—学習動機尺度

基本的学習観尺度—学習動機尺度についても①や②同様に、主成分間の相関係数を算出した (Table 4 参照)。その結果、基本的学習観尺度の「学習に対する積極的態度」—学習動機尺度の「動機づけの高さ」「学習内容の重要性」「学習の功利性」の、いずれの主成分との間にも有意な正の相関が得られた。また、基本的学習観尺度の「学習に対する柔軟性」と学習動機尺度の各主成分との間にも同様に、有意な正の相関が得られた。

Table 4 主成分間の相関係数 (基本的学習観尺度—学習動機尺度)

		学習動機尺度		
		動機づけの 高さ	学習内容の 重要性	学習の 功利性
基本的 学習観 尺度	学習に対する積極的態度	.35***	.27***	.24***
	学習に対する柔軟性	.53***	.41***	.35***

*** : $p < .001$ ** : $p < .01$ * : $p < .05$ † : $p < .10$

考 察

本研究では、太田ら (2003) の主成分分析で整理された大学生の学習に対する認知的側面の構成概念を基に、それらの関連について検討を加えた。以下、各主成分間の関連を踏まえつつ、考察を加えていく。

1. 学習態度尺度—基本的学習観尺度間

学習態度尺度—基本的学習観尺度間における主成分間の相関係数を求めたところ、「自信の無さ」—「学習に対する柔軟性」以外で有意となり、すべて負の値を示した。具体的には、基本的学習観尺度の「学習に対する積極的態

度」と「自信の無さ」「あきらめやすさ」で相関係数は -0.30 前後と中程度になった。このことから、学習に対して積極的な態度を持っている学習者ほど、①あきらめにくい、②自信の無さの度合いが低い、といった傾向を持つことが考えられる。また、「学習に対する柔軟性」と「あきらめやすさ」との間で負の相関がみられた。その理由としては、「学習に対する柔軟性」に含まれる項目が、「うまくいきそうもないと感じると、すぐやる気がなくなってしまう」など、「あきらめやすさ」に関する項目を中心に構成されていたことが挙げられよう。

2. 学習態度尺度—学習動機尺度間

次に、学習態度尺度—学習動機尺度間における主成分の関連を検討すると、「自信の無さ」と学習動機尺度の各主成分との間の相関は $0.08 \sim 0.17$ と極めて低い値であったのに対し、「あきらめやすさ」と学習動機尺度の各主成分との間の相関は $-0.28 \sim -0.44$ となり、中程度～やや強い相関を示していた。この点を踏まえて結果を解釈すると、あきらめやすさの度合いが低い学習者ほど、①学習に対する動機づけが高い、②学習することへの重要性を認識している、③学習によって得られる利点についての認識を持つ傾向があると考えられる。加えて、相関係数の強さを考慮すると、あきらめやすさの低い学習者は、学習で得られる利点を認識するよりはむしろ、学習そのものに対する興味を持つ傾向のあることが推測される。

3. 基本的学習観尺度—学習動機尺度間

基本的学習観尺度—学習動機尺度の間については、基本的学習観尺度の「学習に対する積極的な態度」「学習に対する柔軟性」のいずれも、学習動機尺度の主成分すべてとの相関が有意になった。このことから、学習に対する態度が積極的であるほど学習に対する動機づけが高く、学習することの重要性を認識しており、学習によって得られる利点を認識する傾向を持つことが考えられる。また、学習方略について柔軟性を持っている学習者についても同様の傾向を持つことが考えられる。

総合考察

太田ら（2003）および本研究を通じて、大学生学習者の学習に対する認知的側面の構造を明らかにし、それらの関連性について検討を加えた。尺度間の関連を検討した結果、学習態度尺度—基本的学習観尺度の間で有意な負の相関が得られ、基本的学習観尺度—学習動機尺度の間で有意な正の相関を示した。さらに、各尺度における主成分に着目し、主成分どうしの関連を検討した結果、学習態度尺度の中の「あきらめやすさ」と、基本的学習観尺度・学習動機尺度のすべての主成分間の相関が有意になるなど、概念間の関連性がより詳細になった。

先行研究では、学習に影響を及ぼす要因として動機づけ、学習観、原因帰属など、単一要因もしくは二要因程度を取り上げた研究はいくつか見られる。しかし、全体としてどのような関連が見られるのかを検討した研究は今までにあまり行われなかった。本研究においては、学習活動に関連する認知的側面として、学習態度・学習観・学習動機の3側面を取り上げたにすぎなかったが、これらの側面間にも関連性が見られたこと、「あきらめやすさ」という態度が他の側面との関わりを持つ傾向が強かったことが見出された。

太田ら（2003）も述べたように、今日では、大学に入学する学生の学力水準が個人間でますます拡大する傾向にある。その中で、学生の学力補償は重要な課題となりつつある。学力向上を図る上で、教育活動の充実は必要不可欠であるが、教育を効果的に進めていく上で、学生自身の学習に対する姿勢、認知的な側面の改善も極めて重要であろう。本研究では、実際の学習遂行成績との関連までは検討されていないため、学習成績にどの認知的側面が最も影響を及ぼすのかについては、今後の研究の中で明らかにする必要があると言えよう。ただ、「あきらめやすさ」という軸において、他のすべての主成分との間に中～やや強い相関が見られた点を考慮すると、学習活動を進める際に、たとえば学生に対し、あきらめやすさを軽減できるようなサポートを行ってみる、といったことは可能かもしれない。もっとも、本研究の結果からは、

諸側面の因果関係までは特定できていないこともあり、認知的側面が生じるメカニズムについてはさらに検討を重ねることが必要である。そこで、今後は認知的側面どうしの発生メカニズムをはじめ、諸側面と実際の学習成績との関係についての検討も行い、学生に対する学習活動へのサポートのあり方を考えていくことが必要となるであろう。

引用文献

- 堀野緑・市川伸一 1993 大学生の基本的学習観の形成要因の考察—心理尺度と面接法による学習者情報と活用— 教育情報研究, 6, 3-7.
- 市川伸一 1995 学習と教育の心理学 現代心理学入門(3) 岩波書店.
- 太田伸幸・崎濱秀行・西口利文・平出彦仁 2003 大学生の学習活動に影響する認知的側面の構造に関する検討 中部大学人文学部研究論集, 9, 39-53.

(2003年4月25日 受理)